

聖書:第一列王記18章41～46節

説教:恵みの雨を降らせる神

はじめに

アブラハムが初めてカナンの地に足を踏み入れたとき主は、「あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与える」と約束してくださいました。それからおよそ千年経ち、ダビデが信仰をもってイスラエルを一つの国としてまとめ上げ、ソロモンが跡を継いでエルサレムに神殿を建てたとき、イスラエルの歴史上もっとも繁栄した時代を迎え、それを見た人々は、アブラハムに語られたあの約束は完全に成就されたかに見えました。

ところがソロモンが亡くなった途端、国は北と南に分裂し、それぞれ勝手な道を歩み始めます。北王国の七代目の王となったアハブもそのような王さまの一人でした。前回は、アハブの所に遣わされた預言者エリヤがバアルと呼ばれる異教の神々を拝む預言者たち四百五十人を集めて、カルメル山と呼ばれるところでどちらが本物の神であるかをはっきりとさせるために、みなが見ているところに薪を積んで祭壇を築き、どちらの神がこの祭壇に火をつけることができるか、コンテストを行ったところを見ました。まず最初にバアルの預言者たちが一生懸命祈るのですが火がつかません。続いてエリヤが一人立って祭壇に水をたっぷり注いでから祈ったところ、天から主の火が降り、すべてを燃やし尽くしてしまい、それを見ていた民たちは「主こそ神です」と叫んでいった。そこまで見ました。

1 アハブ

1) イゼベルを妻とし、バアルに仕えた

今日の箇所を詳しく見ていく前にいくつかのことを確認しておきたいと思います。まずアハブの信仰に関してですが、16章30、31節にこう記されています。「オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目に悪であることを行った。彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻とし、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。」

その結果、イスラエルの神である主の怒りを引き起こしたと、その後に書かれています。当然のことですが、神は黙って見てはいません。

2) 「露も降りず、雨も降らない」

そこで神は預言者エリヤをアハブの所に遣わし、このように言わせます。「私が仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない。」

私が子どもの時のことですが、家には神棚が置いてあり、春秋のお彼岸というような時期になると、七福神の神を描いた絵が飾られていたのを思い出します。その中に恵比寿様と大黒様がいて、豊作を約束する神として農家の人たちはありがたく拜んでおりました。アハブが拜んでいたバアルの神々も同じく五穀豊穡を約束する神と信じられていました。そこへエリヤがやって来て「ここ数年、雨が降らない」と宣言し、これから大飢饉がやって来ると宣言したのですから、これは、バアル神は役に立たないと言ったのと同じ。バアルを拝みなさいと国民に指導していたアハブのメンツは丸つぶれです。それでアハブはカンカンになって怒り、すぐにエリヤを捕まえようとするのですが、エリヤは姿を隠してしまい見つからない。

3) 主の預言者を殺す

そうこうしているうちに雨の季節になっても雨が全く降りません。エリヤが語ったようにイスラエルは大飢饉に襲われていきます。アハブだって手をこまねいているわけにはいかない。妻のイゼベルが、雨が降るようにとバアルの預言者たちに加持祈禱を要請しても、いっこうに効き目がない。そこでイゼベルは何を考えたか。エリヤがイスラエルの地をのろったために雨が降らないのだから、雨を降らせるためにはエリヤを殺すしかない。ところがエリヤは見つからない。そこでエリヤを殺す代わりに、イスラエルの国に残っていた主の預言者を皆殺しにした。実際には、そのとき信仰者であったオバデヤという人が主の預言者を百人あまり洞窟にかくまって助けたわけですが、全員を助けることはもちろんできない。推測ですが、おそらく数百人以上の主の預言者たちが殺されたと考えられます。

これがアハブとその妻イゼベルのしたことです。どう考えてもアハブは主に対してひどいことをしている。まずそのことを確認しておいてから、ではそのようなアハブに、エリヤはどうしたのかを次に見ます。

2 エリヤ

エリヤは、集められた四百五十人のバアルの預言者たちにたった一人で立ち向かいました。この戦いを周りで見っていた人たちは、最初はどちらの神を信じるべきか、態度を決めかねていましたが、エリヤの祈りによって祭壇が燃やし尽くされたのを見て、「主こそ神です」と叫び、バアルの神は偽物であり、イスラエルの神、主が本物の神であることがはっきりとしました。

そこまで読んだらだれもが考えます。「どちらが本物の神かはっきりわかったのだから、バアルに仕えていたアハブ王は神から厳しいさばきを受けるに違いない。」ところがどうですか、今日の箇所には全く予想もしなかったことが書かれている。41節。「エリヤはアハブに言った。『上って行って、食べたり飲んだりしなさい。激しい大雨の音がするから。』」大雨がやって来て身動きできなくなる前に、とにかく食べられるだけ食べて備えておきなさいとアドバイスする。そして実際に、海の向こうに雲が沸き立ち、その雲が発達しながらこちらに向かってくるのが見えてくると、44節でこう言う。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」そしてとうとう大雨が降ってくると、今度はエリヤがアハブの先に立って、アハブが夏の避暑地として滞在していたイズレエルの町まで走る。アハブが困らないようにとエリヤが一生懸命働いているのです。アハブは、主の目に悪であることを行っていたのですから、主の敵であるはず。それなのにどうしてエリヤはアハブに対してこのような親切をするのでしょうか。

3 神

1) 雨を降らせる

まず基本的なところから確認します。イスラエルに雨が降らなくなったのは、アハブの不信仰に怒った主がエリヤを遣わして、「ここ数年雨が降らない」と語ったことがきっかけでした。それが今、大雨が降っています。なぜ降るのでしょうか。18章1節にこう書かれていました。「かなりの日数を経て、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。『アハブに会いに行け。わたしはこの地の上に雨を降らせよう。』」

神ご自身のほうから「この地の上に雨を降らせよう」と語ってくださったので雨が降った。それはよいのですが、ではなぜ神は心変わりしたのでしょうか。大飢饉で人々が苦しんでいたの、神は

見るに見かねて雨を降らせたのか。そのような単純なことではありません。アハブの罪が原因で雨が降らなくなったのですから、雨が降ったということは、アハブの罪がなんらかのかたちで処理されたということではなければ筋が通らないのです。いったいどこでどのようにアハブの罪が赦されたのか、そのことは後で触れることにして、神が気まぐれで雨を降らせているのではなくて、罪の赦しがあって、それで雨が降った。そのような順番があることをまず確認しておきます。

2) 悔い改めたのは誰か

なぜかというところはとりあえずわきに置いて、アハブの罪が赦されたのだという前提に立てば、確かに今日の箇所でエリヤがアハブに非常に親切にしているというのは筋が通り、説明がつく。

そうするとこの箇所の問題は、一つに絞られてくる。アハブの罪はいつどのようにして赦されたのか。聖書のどこの箇所を見ても、アハブが自分の罪を悔い改めたというようなことは書いていません。悔い改めもしないのに罪が赦されるのでしょうか。もしそうであるなら、イエス・キリストの救いはいらぬ。私たちは何をしても赦されるという話になる。そんなことは絶対にない。必ず誰かが悔い改める必要がある。

では、このとき悔い改めたのはだれか。39節にあります。「民はみな、これを見てひれ伏し、『主こそ神です。主こそ神です』と言った。」どちらの神を信じるのか、態度を決めかねてどっちつかずによろめいていた民たちが、競うようにして「主こそ神です」と叫んだ。悔い改めたのは民たちでした。それでイスラエルに再び雨が降るようになった。

3) いつ、アハブは悔い改めたのか

それはわかった。でもアハブは依然としてなにも悔い改めていません。それはどうなるのか。彼は悔い改めるどころか、これから先も悪を積み重ねていきます。それでも神はアハブを救おうとするのか。そんなのはおかしい。いったい神は何を考えているのでしょうか。

ここだけ見ても解決はありません。この後、アハブがどうなっていくのかを見たとき、初めて見えてきます。話が21章のところまで進んだときのことです。エリヤが再びアハブの所に来て、「主は、アハブの罪のゆえにわざわいをもたらす」と厳しいことばを語る場面が出て来ます。それを聞いたアハブはどうか。21章27節。「アハブはこ

れらのことばを聞くとすぐ、自分の外套を裂き、身に粗布をまとして断食をした。彼は粗布をまとして伏し、打ちひしがれて歩いた。」アハブはその時人生で初めて悔い改めていく。

そうするとどうということになるのか。エリヤがバアルの預言者たちと戦ったときは、アハブは頑なになって悔い改めなかったけれど、必ず悔い改めるときが来ると神はご存じで、その時を忍耐しながら待っておられた。今はまだ悔い改めていなくても、救いを先取りするようにして雨を降らせたこととなります。

ここを読んだとき、なぜ神は悪人であるアハブのためにも雨を降らせるのか。エリヤはどうしてここまで親切なのか。不思議でした。でもそれは、神がさばきを先延ばしにし、かえって罪人である私たちに神の恵みを注いでくださりながら、立ち返る時を忍耐しながら待っておられた。そのような神のあわれみのゆえであったことに気がつきます。

改めて神の忍耐がなければ私たちは滅ぶべきものであったことを覚えて、また御名をあがめます。